

多様な患者に対応するユニークな専門外来が、高砂市民病院に相次いで設置されている。

「摂食・嚥下外来」は、口やのどに問題のある人に食べ物ののみ込み(嚥下)を指導する。県内でも大学病院以外での開設は珍しい。

担当するのは言語聴覚士の杉下周平(36)だ。医療事務をしていた27歳の時、困っている人がいるはずと、当時は少なかった言語聴覚士の資格を取得。国立病院機構徳島病院を経て2008年に高砂市民病院に就職した。「信頼できるスタッフがそろっていた。経営難は知っていたが、大丈夫と確信が持てた」

脳外科や耳鼻咽喉科の医師や看護師、栄養士らとともに嚥下障害をチームで診る体制を整えた。同年10月に開設した外来は月2回ながら、1年目には100人が訪れた。

「(よく)で診てもらえるか分からず、困っているお年

# 再生の処方箋

報告・高砂市民病院

④

## 地域病院に新たな活路



摂食・嚥下外来を受け持つ杉下周平。看護師との連携が対処のかぎを握る＝高砂市荒井町紙町

寄りが、地域にはまだたくさんいる」

杉下の医療用携帯電話に、病棟の看護師からもひっきりなしに電話が入る。「飲み込む様子が少し変なんです」。そんな看護師らの気づきに、迷わず駆けつける杉下。高齢の入院患者が多い高砂市民には欠かせない存在となっている。

看護師が中心となつて、きた専門外来もある。今年10月に開設された「ストーム外来」は、大腸がんなどの手術で人工肛門を設けるにあたり、手術の前後の管理を支える。看護師中瀬睦子(41)が担当し、手入れ法や専用装具の選

方、皮膚トラブルなどに対する、患者の不安を和らげ

8年前から床ずれや傷口ケアの対策チームに入り、昨年、専門性を高めようと「皮膚・排泄ケア認定看護師」の研修に臨んだ。人工肛門を設けた患者の退院後が一変する悩みに対処できず、もどかしかった

大学病院のストーム外来で実習を受け「退院後も支える仕組みが高砂にも必要」と痛感した。上司に提案したところ、外来立ち上げが決まった。

患者が「相談してよかった」と安心した様子で次の予約を入れる。病棟を兼務する忙しさを忘れさせてくれる一瞬だ。

ほかにも学習障害に対応する「読み書き外来」、糖尿病患者対象の「フットケア外来」など、医師以外の医療従事者が中心となって設けた専門外来は合計六つある。

### ■専門外来

細やかな医療ケアを「外来」に位置づけることで、診療を望む患者に情報を広く発信できる。そして、診療報酬を得ることもなる。専門外来によって地域病院に新たな魅力が加わる。

敬称略 (増井哲夫)